

## 次は創造主神と呼ばれる親音について

伊耶那岐の神・伊邪那美の神

言霊 イ 𐤎：先宇宙の剖半が意識の原点である 天の御中主の神・言霊ウから始まり、主体側の言霊アオエの母音、客体であるワヲエの半母音、それに半母音を結んで目に見える現象を生むきっかけとなる八つの分のみ父韻 チイキシリヒニが確認されました。先天を構成する十七の言霊のうち十五個が出揃ったこととなります。残りの二個の言霊が伊耶那岐・美の二神である言霊イ・𐤎であります。

ここで今までに出てきた言霊を振り返って考えてみましょう。初め何もない宇宙が剖半を開始して次々と母音ウオアエ半母音ワヲエが確認され、次にその双方を結ぶ八つの父韻チイキシリヒニの働きが出てきました。このことについて次のような疑問が出てくるのではないのでしょうか。言霊ウアオエ・ワヲエの母音・半母音は宇宙の实在ですから、それが永久に存在するという事はわかる。けれどその双方に働きかけて現象を生む八つの父韻は、なぜそのような働きかけの力を持っているのか。その原動力はどこから来るのか、です。宇宙の実際に働きかける人間知性の原律と言われる 八父韻の力の出所は何か、ということです。そしてその疑問に 根底から答えるのが言霊イ・𐤎なのです。人間の心の先天構造の宇宙剖半はこの十六・十七番目の伊耶那岐・美の言霊イ𐤎まで来て、人間の創造意志が「いざ」と発動されます。言霊イ・𐤎は創造意志の宇宙です。そしてこの創造意志の働きが父韻チイキシリヒニなのであります。

注一、今は使われなくなったが、昔は「いざ」を去来と書いた。また去来を「こころ」とも読んだ。伊耶那岐は心の名の氣であり、伊耶那美は心の名の身ということである。心の名つまりは言霊のことを指す。

その 187

「古事記と言霊」島田正路氏著書より

## 親音 2

イザナギの神出現で出揃った五つの母音について考えてみましょう。言霊は人間の五官感覚の意識が出てくる元の宇宙です。やがてこの意識から人間の欲望が、産業経済活動が起こってきます。言霊オは経験知の元の宇宙であり、言霊アは感情、言霊エは実践知、言霊イは創造意志の宇宙です。五つの母音宇宙から現出してくる現象のうち、言霊イの創造意志というものは現象としてそのものが現れることがないことにお気づきになると思います。創造意志は縁の下の力持ちで他の四つの母音から出てくる現象の原動力になるものです。五官感覚に基づく欲望が起こるのも創造意志が底に働くからです。経験知も感情も実践智もその底で生きようとする意志があるからです。言霊イは他の四つの母音ウオアエを支え、統合する立場にあります。

言霊イ（𐤎）はチイキシリヒニの八つの父韻に展開して、この八父韻がウオアエ・ウヲワエの母音・半母音をそれぞれ結び合わせ、現象を生み出します。

同時にこの言霊イは、生みだされました現象の一つ一つに、それにふさわしい名前をつける根本原理でもあります。日本語の名とは一音一音の言霊の結合で付けられています。その言霊とは実は物事を人間の創造意志（言霊イ）の見地に立って見た時の根本要素のことに他ならないのです。

以上お話ししました言霊イの働き、内容をまとめてみましょう。それには三つあります  
 第一は人間の創造意志生きようとする意志となって、他の四つの母音ウオアエを支えます。  
 第二は人間の創造知性の根本律である八つの父韻チイキミシリヒ二に展開して、父韻は四母音・四半母音を結びつけ、現象である子音を生み出します。  
 第三は生み出された現象にふさわしい名前をつける根本の原理となります。

これら言霊イの三つの働きをわかりやすくするために、上の図を挙げてみました。言霊イは他の四つの母音の統括力として縦に五つの母音の頂点にあり、横にチイキミシリヒ二の八つの父韻に展開して、その父韻が各母音と半母音同士を結びつけて  $8 \times 4 = 32$  で目に見える現象の要素である 32 個の子音を生み、更にそこ確認された合計五十の言霊によって物事の真実の姿に最もふさわしい名前をつけることを可能にします。

この世の出来事の全てを創造する主人公であると同時にそれら全ての名前をつける原理であるもの、そのために言霊イ（𠬞）は誰の四つの母音や八つの父韻と区別して特に親音と呼びます。

言霊イである伊耶那岐の神を神道では創造主神、また各宗教では創造主と呼ぶ所以なのであります。

次に言霊イ（𠬞）の内容を表す漢字を拾ってみましょう。生・意・胃・石・五・居・井・稻などが挙げられます。

・ ・ その 188 に続く

## 親音

「古事記と言霊」島田正路氏著書より

その 188

以上で人間の精神の先天構造を構成している十七個の言霊ウ・アワ・オヲ・エエチイキミシリヒ二・イ𠬞が全部出揃いました。この先天の十七音の言霊の活動によって、後天である人間の色々な現象が生み出されていくこととなります。その後その後天現象の最小の単位を言霊子音と呼びます。その数は先にお話ししましたように四つの母音掛ける八つの父韻で計三十二個子音となります。この子音を生む作業を「子生み」と呼びます。この世の現実の現象で言えば、父と母が結ばれて子を生むことです。

「子生み」の話に入る前に、今までお話ししました先天構造についてさらに詳しくお話ししておき

たいと思います。心の先天構造といいますのは、人間が人間である限り誰しも天性与えられている精神の基本構造でありますので、この先天構造の内容を詳しく知り、それを自らの心の内に確認すればするほど、目の前に起こる人間の心の営みについて、その成り立ちや将来の動向に的確な判断が下せるようになるからであります。それはちょうど物質の原子核内の構造が正確に分かれれば、物質現象の研究の飛躍的な進歩が可能になるのと同様であります。

まず宇宙剖判の話で確認されました先天十七言霊が過去の文献でどのような名称で呼ばれていたか、を明らかにしましょう。五母音五半母音を左の図のように並べます。アオウエイで天の御柱、ワヲウエヰは国の御柱と呼びます。そして母音と半母音を結ぶ八つの父韻のつながりを天之浮橋と言います。五つの母音は仏教では地水風火空の五大、儒教では木火土金水の五行、キリスト教では五大天使とって表徴しています。

皆その実体はアオウエイの母音のことです。そして人間に自覚されたこの五母音の並びを神道では心柱（忌柱・天の御量柱）と呼びます。伊勢神宮の正殿の中央、床下に五尺の白木の柱が安置されていますが、その表徴です。

その 189 に続く

## 親音

「古事記と言霊」島田正路氏著書より

その 189

人間の心はこの五つの母音の<sup>たな</sup>置きを住処としています。これ以外の場所はありません心の住家である五重の界層それが人の住家である（家）の語源です。まだ伊耶那岐・美の神である言霊イヰが交流して神羅万象を生む道を生命（イの道）と言います。その生命が発動する瞬間が今（いの間）です。

昔の神道ではアオウエイ五母音を天の御柱として心の中に立て、自覚することを「いつき（齋き）」と言いました。五作（<sup>いづ</sup>作る）または五<sup>いづ</sup>次き、の意味であります。母音と半母音が結ばれて現象を産む父韻イ・チイキミシリヒニ・ヰの十音の活動を「とつぎ（嫁ぎ）」と言います。<sup>とつ</sup>作または<sup>とつ</sup>次と言います。

話は変わりますが、宇宙の真理としての神に対する人間の態度に三種類あることをご存知でしょうか。それは「いつき」「とつぎ」と「おろがむ」態度であります。「いつき」は自己の心の中にアオウエイ五母音宇宙を確認・自覚することです。「とつぎ」はイ・チイキミシリヒニ・ヰの十音を運用して文明社会を創造し経営していく道であります。最後の「おろがむ」とは愚か者が神に対する態度です。

昔の日本人の神道は齋き嫁ぐことのみで、おろがむ 態度はありませんでした。神や仏を自分とは違う対象として、客体として拝む態度は、幼稚な魂を教育するために仏教やキリスト教が用いた

方便としての方法です。それを後になって興った日本の神社神道が信仰としてのやり方を真似たものなのであります。

「注1」 仏教の五大・儒教の五行と言霊五母音との関係は次の図の通りである。また江戸初期天台僧上なる天台宗の僧侶が江戸城の守護として目黄、目赤・・・など五つの目の色の不動尊お城の周りに祀っていた。参考のためその不動と言霊の関係を合わせて記載する。ちなみに仏教の不動明王とは言霊で言えばアオウエイ五母音が心の中にすくっと自覚・樹立された姿である。この時心はいかなることに動じないことを不動尊と表徴したものである。

「注2」 ここに語母音の縦の順序をアオウエイとする理由は次のとおりである。言霊の学が進むにつれて、五十音が全て確認されることになる。その自覚された五十音で人間の心を表すように並べると、心の持ち方によって種々の五十音表を得ることができる。母音がアオウエイ並ぶ音図を古代「天津<sup>すがそ</sup>管麻」と呼んでいた。清々しい心の衣の意で、人間が生まれた時から与えられたまっさらな心の構造を示している。生まれたままの人間が持つ判断力は母音アオウエイの順序で表される。

以上で先天十七言霊についての復習を一応終えることとして、宇宙剖判の順序に従って十七個の言霊を並べると下の図のようになります。昔古神道はこの先天の構造を天津磐境と呼びました。天津は先天の磐境は五葉坂という意味で、五段階の言霊の階層ということでもあります。天津磐境につきましては後ほど再び検討することとなります。

・ ・ その 190 に続く

+